

陸自駐屯地紹介シリーズ 第44回

北方防衛の中枢 札幌駐屯地

北部方面総監部・北部方面通信群他

駐屯地シリーズ編纂委員会

今回札幌駐屯地を取材することにし
た。札幌駐屯地は北海道防衛を任務と
する北部方面隊の総監部その他が所在
する駐屯地である。先ず北海道を全般
的に概観するに先立ち、ある先輩に電
話した。このシリーズ執筆に当たって
電話でいろいろと話を聞く先輩であ
る。ネタ探しとでもいえようか。記事
の底流に流れる「心」についてヒント
を得る事が多い。今回北海道とは何か
について電話で雑談した。三つの事柄
について話し合った。「守りの日々を
思い起こそう」「屯田兵の苦勞を思い
起こそう」「今陸上自衛隊全般の勢力
削減傾向は何処へ行き着くのだろう
か」

人生の盛りを北海道に勤務し、定年
となつて北海道を離れて余生を送つて
いる人は多い。そのような方々が北海
道に寄せる思いは静かに語られること
が多い。だが今回は語る語りがあつた。
その思いを代弁してみたい。

北海道大観

北海道は津軽海峡を挟んで本州の北
部に位置し面積は日本の総面積の22
パーセントを占め約7万8千平方キロ
の広さがある。

道内には約180の市町村があり、14の
支庁に分けられているが、分割は近々
見直される予定である。

なお行政機関は北海道庁であるが、
他に昭和25年に発足した中央官庁の北
海道開発庁が地域振興の大きな役割を
果たしてきた。現在は国土交通省の一
局としての北海道開発局が、かなりの
国費を要する事業を担当している。地
形描写をしてみたい。先ず山系から、
最北端の宗谷岬から二つの山系が流れ
ている。一つは宗谷丘陵から天塩山地、
夕張山地と続く高地の連続であり、他
の一つは宗谷丘陵からやや南に離れて
始まる北見山地、石狩山地さらに日高
山脈から襟裳岬に至る高地の連続であ
る。石狩山地は東西に長く連なり、そ
の果ては知床半島の山地に繋がってい
る。これらの山地に発する河川は一級

河川だけでも13水系があり、中でも石
狩川水系、天塩川水系、十勝川水系、
釧路川水系等が有名である。平地は、
宗谷半島の先端に幕別平野、宗谷丘陵
の西側に天塩平野、東側に頓別平野、
天塩山地と北見山地の間に名寄盆地、
その南に上川盆地、富良野盆地と続き
夕張山地の西側に札幌市を中心とする
石狩平野へと続き、日高山脈の東に広
がり帯広市を中心とする十勝平野、釧
路から根室に続く根釧原野、根釧台地
などがある。いずれにおいても広々と
した耕地、牧場が見受けられ、広大な
気分の旅情に誘われる事であろう。

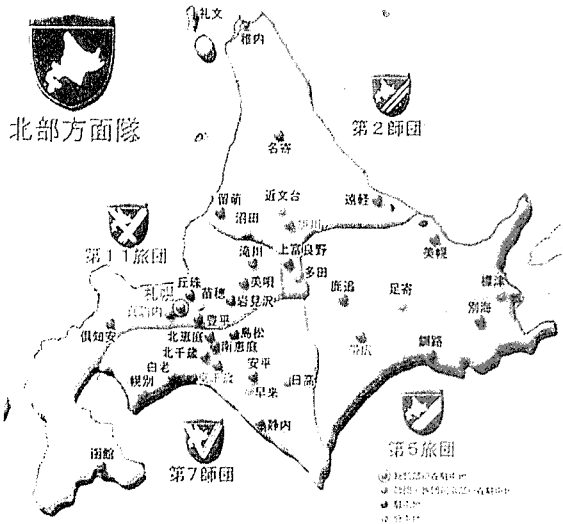
「北の大地」、正に至言、この言葉に
は季節の移り変わり、山
野の起伏、其処に住み成
す人々の生活、全てが籠
もった言葉として味わい
たい。

守るべき国境

北海道の国境は二つあ
る。ひとつは宗谷岬と樺
太最南端の間には海を隔
てた国境が「守るべき国
境線」として厳然として
存在している。そしても
う一つの我が国の領土は
オホーツク海を東に走
り、択捉島、国後島を含
むとして国境線を択捉島

とロシア領得撫島の海中に、もし
て根室東方には齒舞、色丹を含むとし
てその東方の海中に主張している。し
かしながら大東亜戦争終結の昭和20年
8月15日以降のソ連の不法侵入以後我
が国の実効支配が無く、国境線は押し
下げられると云う容認できない状態が
現在まで続いている。

北海道全域に38個の駐・分屯地が所在



である。ソ連は我が国に対して侵攻の意図を持つている脅威であった。先ず諸資料による「ソ連軍」の編成装備に記された大兵力と戦車、空挺、砲兵戦力の強大さ、海兵師団と空挺師団、更には航空戦力の強大さは圧倒されるものであった。また時々新聞などで報道される軍備力を背景とした外交攻勢は、何時それが日本に指向されるかと云う脅威の中にあつたといえよう。キューバ危機、ミグ27亡命事件の時などはその頂点にあつたのではなからうか。侵攻を予測した地域は宗谷方面、根室・釧路方面ばかりでなくオホーツク海沿岸、留萌地区、函館地区など助攻勢力の上陸可能地点が散在し、更に幾つもの空挺降下可能地域が存在している。この様な状況の中で北海道防衛を全うするには何処に部隊を配置したらよいか、予め陣地や障害を構成することなど許されなかつた世相の中で自衛隊草創期から継続された努力に思いを致す時、ただ敬服するばかりである。大東亜戦争以後変転する内乱介入を口実にした国際紛争が続発する中、我が日本が今日まで国土を外敵に踏ませる事なく平穩に過ごせたことは神の加護と先人達の叡知の賜と感謝しなければならぬ。

その平穩に日夜腐心し大きく貢献した中枢たる北部方面總監部の所在地は

札幌駐屯地である。札幌市は石狩平野の南西部に位置し人口約190万の経済、文化、行政の中心である。市名の由来はアイヌ語の「サツ・ポロ」(乾いた広い所) 或いは「サリ・ポロ・ペツ」(大きな湿地のある所) と2説ある。明治2年に北海道開拓使直轄となり、明治4年5月開拓使庁舎が出来て明治8年には屯田兵が入植し開拓を進めた。その開拓には特色がある。その第1は条里制を追及したこと、現在札幌の町並みが直行する道路で区画されている所以である。その第2は農業の発展を目指したこと、すなわち開墾するだけではなく札幌農学校開設に象徴される近代的農法の導入に力を入れ、ジャガイモ・カボチャ・タマネギ等今日の農業の礎を築き、更には葡萄酒、ビール、製粉、製紙など今日の北海道産業基盤に繋がる活動をしたと伝えられている。

札幌駐屯地

羽田空港から札幌千歳空港まで約1時間30分、空港からJR快速電車に乗り約1時間で札幌駅に着く。その札幌駅から西南の方向約4km、札幌市南26条西10丁目に札幌駐屯地はある。

駐屯地外周は南北、東西に規則正しく走る国道市道に囲まれ周囲には住宅や北海学園大学山鼻校舎、北海道警察南警察署などの建物が続いており、総

正門



じてその敷地は都内などと比べて広く、建物の間隔は広く、日中開かれていた商店・飲食店は少なく、また車の通行量に比べて歩行者の数は数える程しかない。駐屯地の地積は13万5千平方メートルで總監部所在駐屯地として最も狭いとのことであり、さらにその中に駐屯地創設前からの市道が走り、五つの地域に区分されているという珍しい駐屯地である。駐屯地正門に着いて迎える待つ間、隊内道路を行き来する多くの隊員方を観察できた。演

習の準備若しくは後始末だったのでうか、午後の課業時間、重量物を運搬する数多くのグループがあつた。やがて總監部広報室に案内され報道班長小松次・2佐に説明頂き、資料も頂戴した。

駐屯地名の由来

警察予備隊創立当初「札幌駐屯地」を名乗る駐屯地は現在の場所とは別の所にあつた。札幌市東区にある現在の苗穂分屯地である。昭和26年12月、当時サツポロビル株式会社ホップ栽培農園と大原リンゴ園跡地に警察予備隊第2管区總監部が駐屯する駐屯地が開かれ、翌27年10月に北部方面隊が創設されてその總監部が置かれることになり、その重要度に相応しい駐屯地名を選ぶにあたり、現苗穂分屯地が名乗っていた「札幌駐屯地」の名前を召し上げたとのことである。当時第2管区總監部は北海道ばかりでなく宮城県以北の東北地区も管区としており、その名に相応しい駐屯地名を探したあげく、隼下駐屯地の名前を召し上げるといふ荒技を行使したのだと想像している。

駐屯部隊

現在札幌駐屯地に所在する部隊を上げてゆきたい。

北部方面總監部

隷下に第2師団、第5旅団、第7師団、第11旅団、戦車群、特科団、高射

特科団、航空隊他を擁しその活動の方向付けをする部隊であり、方面総監酒井健陸将が続べる司令部である。現在標榜していることは何か、北部方面総監部広報室発刊の広報リーフレットを開いてみることにする。

その第1は「北海道への本格的な侵略に備えること」が挙げられている。北部方面隊は隊員数、戦車・装甲車、火炮等において我が国第一の部隊であり、近年経済復興とともにロシアが軍備整備に乗り出してきた情勢下で、やはり当然の使命であろう。

第2は「北海道内で生起する災害やテロ等の事態に対処する」ことが上げられている。北海道は広大である。ひとたび大規模災害が起これば対処の勢力、器材を集中するための組織としてやはり陸上自衛隊の量的勢力が不可欠であろう。テロや小部隊潜入などに対して武器を持って制圧できるのは陸上自衛隊以外にはあり得ない。

第3は「北海道以外で生起する大規模災害や国際平和協力活動に部隊を派遣すること」。昨今日本全国に地殻の歪みが限界に近づいていると云うプレートテクトニクス理論が唱えられている。現実には北海道、宮城県、中越、阪神等に地震が発生したがその度に全国各地から部隊が派遣され救助及び復興に当たった。そのことは今後も益々重

北部方面総監部



視されている。もし北海道以外に大災害が発生すれば待機している部隊が速やかに派遣されるということ表明されているのである。そしてその対象は国内ばかりでなく国外に及び、国外の場合は自然災害ばかりでなく動乱終了後の民政回復についても考慮されている。

第4は「将来の任務遂行を見据えた研究等を行うこと」。将来どのような任務遂行を想定しているのか、その対象は自然災害なのか、侵略なのか、侵略とするならば従来型の侵略なのか、そうでないのか、何処の国なのか、どうもこのことは触れるべきでないような気がする。筆を止めたい。次に駐屯する部隊について述べてみよう。

北部方面総監部付隊

北部方面通信群

北部方面会計隊

北部方面情報処理隊

第101通信直接支援隊

札幌地方協力本部西部地区隊

北部方面警務隊

会計監査隊北部方面分遣隊

札幌駐屯地業務隊

等であるが、その現状や辿ってきた歴史を述べるにあたりそれぞれの部隊毎の記述はなじまない。大規模な出動やイベント支援においては、個々の部隊ではなく駐屯地部隊を挙げて対処したと考えられるからである。以下順不同で述べたい。

洞爺湖サミット

この国際会議は平成20年10月7日及び8日の両日開催されたがその準備段階から終了まで支援した。準備からの支援期間が長いことからしても北部方面隊は大きな支援任務を果たしたであろうことは十分に想像できる。テロ・ゲリラに対する警戒や要人空輸、警察の支援、その他の任務が付与されたと考えて良い。

現に首都圏に於いても対テロ対処の演習が実施されたようだ。だがその様相が報道されることは少なかった。一つの考えがある。「自衛隊の支援が安全保障に係わる故に、その内容を秘め

ておかなければならない」。サミットの正式メンバー国は8カ国、それが持ち回りで開催を担当するとすれば間違いない。7年後には開催を担当しなければならぬ。その時点で世界情勢、特にテロ・ゲリラ情勢が治まっている保証は何処にもない。従って今回自衛隊が果たしたであろう詳細はどこかに深く秘蔵されるべきと考えてよい。我々は自衛隊が研究し蓄積したノウハウ・ハウが以後の国際首脳会議を支えることを期待したい。

札幌オリンピック支援

既に30余年の昔となる。昭和47年2月3日から2月13日の間、札幌市で冬季オリンピック大会が開かれた。日本スポーツ界に一大転換をもたらした大会である。その転換は、スキージャン



災害対処指揮所訓練(札幌駐屯地)北海道、札幌市、開発局等の関係機関が参加し、道央区大規模震災対処について訓練して連携強化を図った

プのノーマル・ヒルで笠谷、金野、青地3選手が表彰台を独占した事に始まり、その後スキージャンプに限らず、複合競技、スピードスケート、フィギュア等の隆盛に繋がったのである。自衛隊の支援について若干触れて見た。

当時ジャンプ台を競技可能な状態に仕上げる為には、只人海戦術の他はなかった。新設のジャンプ台最上地に登って隙間無く横一列となり、わら靴で力を込めて新雪を踏みながらジャンプ台の下まで下りて来る。その列は何れも何列も繰り返される。ジャンプ台だけでなくランディングゾーンも念入りに整備される。漸く固まったところでスキー熟練者が横滑りで斜面を平坦にして仕上げ、最後にシユプールが付けられるのである。自衛隊無くして出来ることではなかったと思う。ダウンヒルやノルディックに於いても必要だった。元自衛官の中にはこの頃の支援を鮮明に記憶しておられる方がおられると想う。

さっぽろ雪祭り支援(表紙裏写真)
同じように地域に対する支援で歴史を重ねていることがある。昭和55年第6回雪祭り以降続けてきた雪像制作である。発足は現在の北部方面通信群の前身、第10方面通信隊が作成した「栄光」で、以来自衛隊は大通り公園ほかでなく真駒内駐屯地を開放して雪像

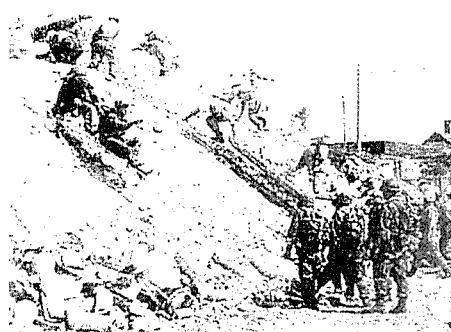


警戒中の女性隊員

作成で支援した。体力、企画力、新雪輸送力、制作技術など総合力を發揮した両会場の大雪像は実に長い間祭り最大の魅力であった。現在は、自衛隊の削減などの理由から支援規模は縮小され、昨年は1基だけとなった。それでも「エジプトの遺跡」と題したピラミッド、スフィンクス、ラムセス3世像の3つからなる高さ18尺、幅30尺の像は制作期間28日間、輸送した雪の量ダンブ580台が必要であった。

災害派遣の教訓

札幌駐屯地がリーフレットで「災害派遣の歴史」として上げている中に、平成5年7月12日午後10時17分に発生したマグニチュード7・8の北海道南西沖地震がある。人口約4千名の奥尻島で死者172名、行方不明26名、重軽傷者143名の被害が有った。そして年間予算50億円の規模の奥尻島で総額60億円の被害を受けたのである。自衛隊は勿論災害派遣に出動した。島内に所在した航空自衛隊第29警戒隊が押し取り刃で災害派遣活動に従事していた時、地方行政担当者から信じられない言葉が浴びせ



消防と防災訓練

られたと新聞で報じられた。曰く「自衛隊など役に立たない。寝る場所や食事準備などかえって足手まといだ」。この報道に多くの自衛官、元自衛官は心中怒りに滾つたに違いない。すぐ防衛庁長官が北海道に飛んだことを覚えている。事情説明などと云う生やさしいことではなく、政府を代表した詰問使だと思った。その後陸上自衛隊も投入されたが、その時にそれまで関係者だけの一つの専門概念が一般的に知られるようになった。「自衛隊の出動は完全自己完結型である」。自衛隊は出動先に負担をかけることが無かったことは知られていなかったのである。他に自衛隊以外の場所でも一つの貴重な教訓が得られたのに、これが後の阪神淡路大震災に活用されず誠に残念と云

う他はないことがあった。それは地震発生直後の火災に対処していた僅か10余名の消防関係者が演じたことである。延焼中の家屋の未延焼の家屋2戸を破壊して火災をくい止めた。この破壊消防という手法がもし神戸市長田区で発動されていたなら6千名を超える死者は僅かかも知れないが低減されたのではあるまいか。

リーフレットには他に阪神淡路大震災、舞浜トンネル崩落事故、インドネシア国際緊急医療航空援助隊、パキスタン国際緊急航空援助隊、新潟中越沖地震災害派遣等に出動した事が記されている。

駐屯地行事

全国各地の駐屯地には駐屯地を一般に開放して行われる駐屯地創立記念日の行事がある。来隊した隊員家族、周辺住民、日頃協力して頂いている来賓特に幼い子供達が楽しみにしているプログラムが組まれていることが多い。ここ札幌では8月下旬に行われ、部隊対抗の運動会として趣向を凝らした熱戦が繰り広げられる。10月下旬は北部方面隊創立記念行事が、11月中旬には球技大会が、12月中旬には年忘れ大芸、さらに1月上旬には雪中ラグビーで成人祝賀行事を行っている。ボールを巡って降り積もった雪を蹴散らし突貫する若者達の姿と歓声を想像して頂き

たい。

屯田兵史蹟

北辺防備の歴史は、江戸時代末期に遡る。ロシア帝国の東進がシベリアからカムチャツカに至り、我が北辺を窺う最中に、我が国にアメリカなどからの開国要求の波が押し寄せた。その要求を契機とする明治維新を終えた日本は辺地北海道の開拓と防備の双方に望まなければならなかった。

屯田兵配置は、開拓と辺地防備を合わせた政策であり、日常は原野の開拓に従事し、一朝事あれば銃を執つて外敵と戦う兵農の入植者であった。明治初年榎本武揚によつて提唱されたのが最初であるという説がある。だが現実には明治7年(1874年)屯田兵則が定められ、その翌年明治8年に現在の札幌駐屯地の西北約10kmの琴似に入植したのが最初であった。次いで駐屯地の直西北側の山鼻地区に屯田兵第2中隊が入植した。約200戸を1個中隊として、軍隊行動で開拓作業に励んだと伝えられている。屯田兵入植はさらに石狩の東部、釧路、室蘭、滝川、上川等に明治32年まで続き、その後北辺防備は第7師団に引き継がれていった。この間西南戦争に出動し旧幕府側士族の旧薩摩士族に対する怨念からの奮戦と戦後の論功行賞の不公平などの物語を残している。

駐屯地の西側を走る国道230号線北西一帯を山鼻といい、この辺りが北海道屯田兵草創の地であり、屯田兵第2中隊の所在地であった。さらに駐屯地正門から南に約200mに道路に面して屯田兵像が建っている。軍帽、軍服のまま鋤を振っている姿であり、引き締まった顔と目が北海道開拓時代の苦難の日々を後世に伝えようとしているかの如くであった。現在でも福島県・宮城県の家や社には維新後の士族の艱難辛苦が伝えられている。流浪の先で餓えと酷寒に苦しんだ「孝明天皇への尊皇と領主松平容保への忠節の民」その後の哀切である。冒頭に述べた福島出身の先輩が進る思いを披瀝した所以であらう。

備えへの憂い

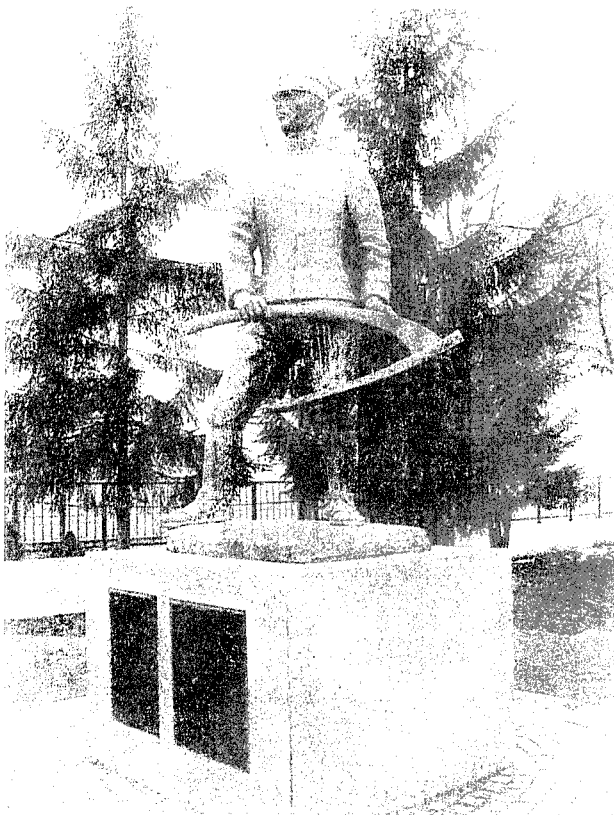
筆者が30代の頃と現在とでまるで逆になった流れがある。地域からの部隊削減は地域にとつて大きな政治問題になりかねない時勢となったことである。今、仮に北海道の地方都市から1箇駐屯地を丸々廃止すれば一大反対運動が起きる気がする。防衛上の問題より地域振興上の問題である。陸上自衛隊勢力見直しはこれら地域の要求に応じながら部隊の看板だけを残り実質勢力を削減するコア連隊化等の方法や、部隊の分割駐屯等を行いながら勢力を削減することで凌いできた。だが勢力

削減に当たって真つ先に検討しなければならぬのは防衛作戦が全う出来るか否かでなければならぬ。その構想の前提条件の脅威の分析は、考慮されていると信じた。

今回の取材にあたり最初に元北方総監大越兼行氏陸自63に啓示を頂いた。又札幌総監部報道班長小松2佐にご協力頂いた。心から感謝申し上げます。

但し最後の「備えへの憂い」は全く筆者の私見であり誰の意見を借りたものではない。

文責 松村興延陸自64



屯田兵像